Ⅰ　まちづくりコンセプト「すんで楽しい清流のまち」

わたしたちは、次のようなまちづくりコンセプトのもと、福岡県を代表する田園都市である八女のまちづくりについて考え、次項以降に示す２つの提案を行った。

■まちづくりコンセプト

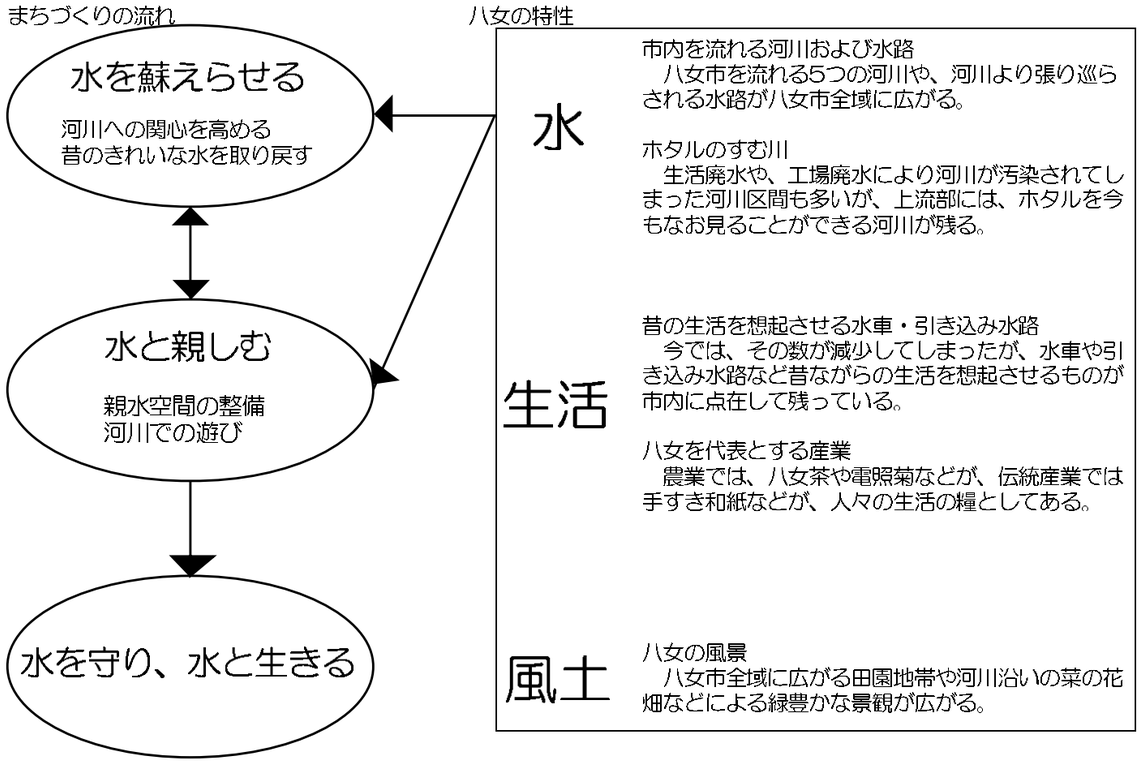
私たちが八女のまちづくりを考えていく上でのコンセプトを以下のように定めた。

「すんで楽しい清流のまち」

- 住みやすい環境の実現
- 澄んで美しい清流の再生
- 生活と水との距離を縮め、親水性を高める

まちづくりの方針

八女には、様々な資源が存在しており、これらの利活用により八女らしいまちづくりを行っていくことを考えた。
まちづくりの流れと八女の特性との関連は以下のようになる



これら資源は、すべて八女を流れる河川とその歴史が育んできたものであり、八女のまちづくりを進める上で、水辺の空間を考えることは必要不可欠である。
このコンセプトの下、最終的には自らの手で水を守り、水と生きることでこの地が、健やかにのびのびと暮らせる場所となることを将来像として掲げる。

■山内地区をまちづくりの起点に

八女市は、福岡県の南部に位置し、きれいな空気と緑に囲まれ、豊かな土壌と伝統文化、特産工芸品や農産物、文化財等の豊富な場所である。
その中でも山内地区は豊富な自然に囲まれ、 水路や河川の水がきれいであり、昔ながらの風景が広がっている。
また、水路で容器を洗ったり、子供達が釣りをする等、日常生活の中で水との関わり合いがある地区である。

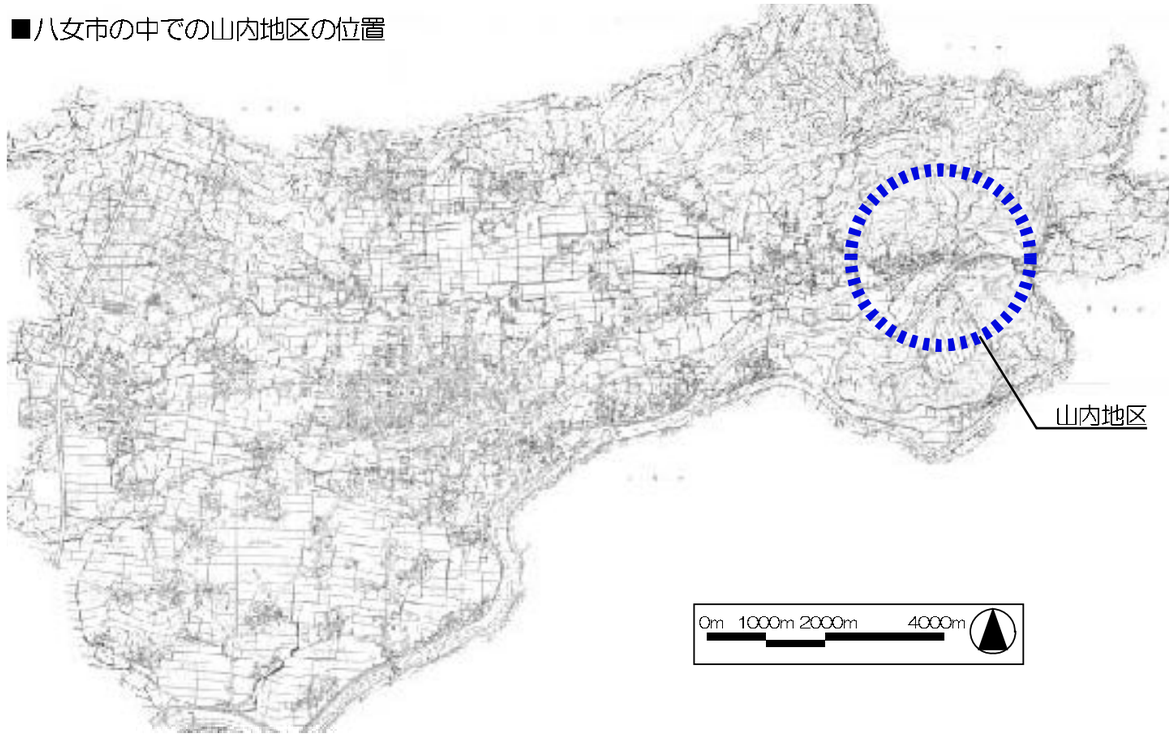
↓

将来、山内地区を八女市のモデル地区にして、川、水路と親しむことのできるまちづくりを行っていく。

↓

この地区での活動を中心、きっかけにして水路、川への関心を深めて他の地区に広げていく。

■八女市の中での山内地区の位置



北海道恵庭市「水と緑のやすらぎプラン」：茂漁川

■概要

河川や道路、公園などの環境面での整備や保全のあり方について、恵庭市が主導で目標を定める。これに際し、公共空間がコミュニティ活動の場になるように計画段階から流域の市民と話し合いながら進める。

1987年に河川局が創設した「ふるさとの川モデル事業」と、その理念が一致していたことから茂漁川の改修区間の2.85kmをモデル指定。

2004年には都市景観大賞を受賞した市民の自主的な「花のまちづくり運動」に発展し、今日では個人の庭先をも含めた形に拡大。

■市民の活動

2004年には、流域7町内会で組織する「茂漁川に親しむ会」という環境保全活動を行う市民団体に発展。
日常的なゴミ拾いから河川敷地での花壇造成、子供達と共に稚魚の放流などを行っている他、パトロールを実施し水質汚濁の監視や子供達の川遊びの安全を見届けている。

Ⅱ　まちづくり提案①

山の井公園、中の井堰、川崎小学校、山の井公民館、童男山古墳を山内地区の地域拠点とみなし、その一部には草刈りや公園整備を行い、地域住民の方々が訪れたくなる空間を創出する。
拠点と人々が歩きたくなる道を創出することによって歩行者導線の広がりを図り各拠点間のネットワークを強化する。

これらによって、人々が訪れて、癒やされ楽しめる空間とそれらを結ぶ歩いて楽しい導線ができあがり、住む人にとって楽しい地区が創出されると考え、本項・次項に2つの具体的な提案を行う。

提案①：ホタルの飼育・放流と水路沿いの植栽

身近にホタルが飛び交い、楽しく住めるまち

ホタルを増加させ、身近にある水路や川でホタルが観察でき、住んでいて楽しいまちになるようにするために、ホタルの飼育・放流と水路沿いの植栽を行う。植栽を行いホタルが住みやすい場所を創る事によってホタルの数は増加すると予想される。日常生活の中にある水路や河川でホタルが飛び交えば、生活も楽しくなり、ずっと住みたいまちになるのではないだろうか。また、同時に水環境への関心も高まっていくはずである。

■内容

・ホタルを増やすため、小学生に協力してもらいホタルの飼育を行い、その後幼虫を放流する。
　また、水路上部に植栽を行い、ホタルが発生しやすいような環境を作る。

具体的な内容
　飼育場所：川崎小学校
　　→生徒に協力してもらいホタルの飼育を学校で行う。

　放流場所：山内地区水路沿い、星野川

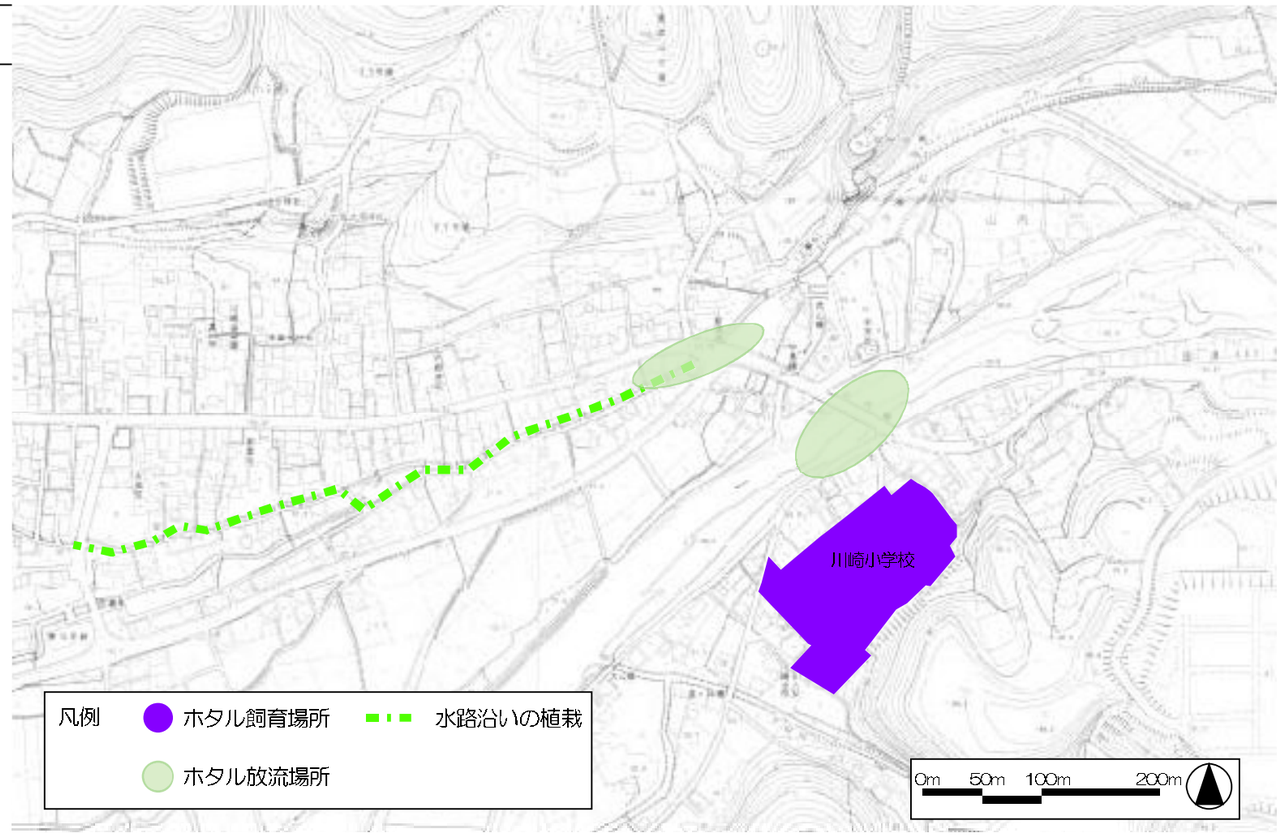
　植栽場所：山内地区水路沿い
　　→車道側は道が狭く植栽は難しいので民家側に植栽を行う。

　植栽の内容：水路沿いの民家の方にも協力をお願いし、幼虫が上陸したときにもぐれるように民家側の水路上部の土をやわらかいものに変える。さらにそこにホタルの好むセリやヨモギ、スゲなどの植栽を行う。また、ホタルの産卵場所としてコンクリート張りになっていない場所にミズゴケの植栽を行う。

　予想される成果：数年後には多くのホタルが水路沿いで見られるようになり、ホタルが観察できる。
　　初夏にはホタルが飛び交い美しい場所となる。
　　ホタル鑑賞遠足の充実、遠足による水環境への意識の高まりがより図られる。

　植栽に関して民家側に行うので、住民の方の協力が必要となる。また、同時に水路に合成洗剤を含んだ家庭排水が多く流れるとホタルやカワニナ、植物なども死滅してしまうので、住民の方への呼びかけと協力が必要となる。そのため、地域住民がホタルを増やそうという意識を持ち、協力して活動を進めていく事が重要である。

山内地区水路：所々に植物はあるが、基本的にはコンクリートで固められており植栽を行う必要がある。
　　また、玉石積みされているところはコケが生えやすく産卵場所として使える。



兵庫県尼崎市「ホタル舞うまちづくり事業」

■概要
1984年（昭和59年）、市民グループ「あまがさきホタルを育てる会」がホタルの里で幼虫の放流活動を開始。
1995年の阪神大震災で一度水が干上がったが、1996年に再び幼虫1万匹を放流。1998年には市内の3学校で種ホタルの産卵からふ化、幼虫までを行い放流。この活動の結果、1999年以降、水路でもホタルが確認されはじめる。
2004年（平成16年）9月には西武庫公園周辺のホタルをはじめとする自然環境の保全に取り組む「西武庫公園ホタルの会」が発足。現在も水路沿いの清掃やホタル鑑賞の夕べの開催、水路沿いの植栽などを行っている。

■活動テーマ
① ホタルを復活させる　　② 地元の方の協調関係
ホタルがうまく成長しなくても、地元の方々と一緒に自然環境の復活ができればという考えのもと活動を行っている。

■ハード整備（市、西部公園ホタルの会）
・水路を覆う木の剪定　　・固い土をやわらかいものに
・植栽:ミズゴケ、ツルニチニチソウ、西洋ススキ（パンパスグラス）、さつき、など

■成果
ホタルの観測数（下流の水路）

1997年	2，30匹	2002年	1974匹
1999年	150~200匹	2003年	2368匹
2001年	2315匹	2004年	1629匹

Ⅲ　まちづくり提案②

提案②：山ノ井公園周辺の親水公園とし

山ノ井公園を、人が集う場所にする

八女市の指定する都市公園の一つである山ノ井公園は、星野川により分断された山内地区をつなぐ山内橋のほど近くにある。山の井堰が作る中州に位置し、敷地内には水難防除の水天宮がある。毎年5月にはそこで地域一体で行う水天宮祭が行われている。また、川崎小学校の児童の多くは山内橋を通って通学するなど、山内地区のまちづくりを考えるにおいて、中心的ともなり得るオープンスペースであると考えられる。
わたしたちはこの山ノ井公園を、山内地区のまちづくりを考える上で重要な鍵を握る存在であると位置づけ、そのあり方について提案を行いたいと考えている。

■山ノ井公園は昔、子供の遊び場だった

山ノ井公園のすぐそばには堰から流れてくる川があり、その川辺は格好の川遊び場所であった。また、公園内には、人柱「中島蔵之介」を称える石碑や、水天宮があり、治水のために壮絶な戦いがあったことを物語っている。
春には桜の名所となり、5月の水天宮祭の会場ともなる公園ではあるが、普段はもっぱら駐車場としての利用に限られており、子供の遊ぶ姿も見当たらない、寂しい公園となっている。
また、星野川を挟んだ対岸の河川敷には、単独で整備された遊歩道がある。小学校の正門付近から川上へと続く小道だが、小学校の児童の大半が通る動線と直交していて、利用者は少なく、それ自身の魅力もほぼ感じられない。

■雑草に埋もれた資源

川辺には鬱蒼と葦が茂っていて、近づけない状況となっているが、その葦の裏には、玉石積みの護岸が残っているなど、いろいろな資源が埋もれている。
葦が茂っていること以外は昔からの変化がない山ノ井公園は、その葦を刈るだけで、親水公園となり得るポテンシャルを持っている。葦は蛍の生育場所となったり、水質の浄化をする効果がある一方、秋に大量に枯れ、それが腐って水質を悪化させてしまうという短所も持っている。現状は、葦が生えすぎている状況であり、水質のためにも草刈りを行うことが必要であり、それは子供の遊び場の創出にもつながる。

■新たな公園への道を創出する

川辺の草を刈ることで、橋をくぐって星野川まで近づけるようにもなる。その対岸には、整備された遊歩道が存在する。星野川の流れは平常時はそれほど速くなく、川に入って鮎釣りをできるほどなので、この両岸をつなぐ、沈下橋や飛び石を置くことで、川へと近づける仕組みをつくる。これにより、川崎小学校から山ノ井公園まで、交通量の多い国道を横切ることなく到達する動線を確保できる。
また、この河川敷をも山ノ井公園と一体として整備することで、子供の遊び場、住民の憩いの場として親水公園としての魅力をさらに上げることができる。

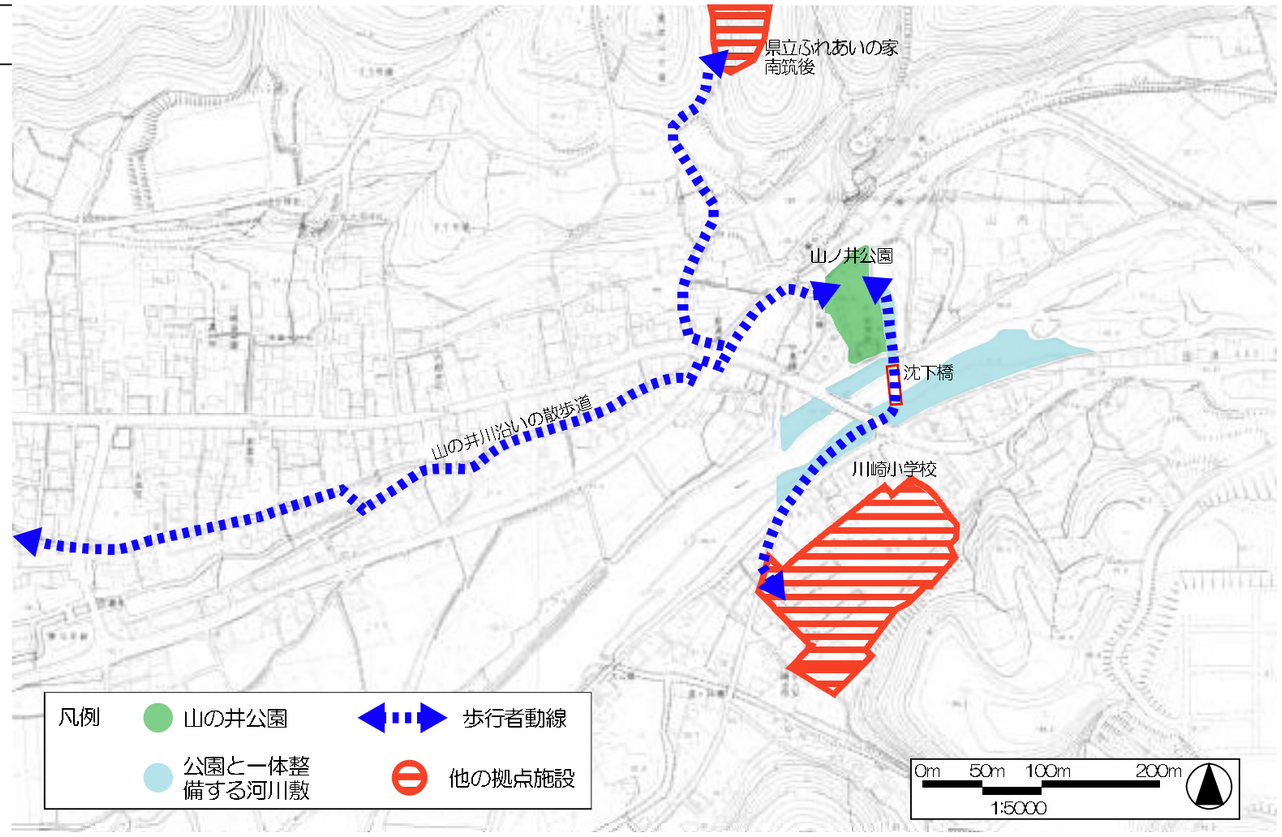
■拠点となる公園へ

山の井川沿いの道は、山内地区の誇るべき散歩道である。その山の井川の始点となる山ノ井公園は、散歩道の始点として、山内地区の持つ自然を十分に感じられる公園、子供の遊ぶ姿が似合う公園、祭り以外でも人が集う公園となることが、住民どうしのふれあいの場となり、この地区に活気を与えることにつながると考えられる。

子供の遊び場だった川辺

水天宮は川と闘った証

普段は駐車場として利用されている



札幌市：精進川

■コンクリート三面張りからの出発

住宅地の中を流れる精進川は、1992年から始まった再改修工事以前は、コンクリート三面張りの河川だった。しかし、その再改修工事において、河川と公園という管理者の異なる土地で、行政の枠組みを超えた取り組みがなされ、一体的に整備が行われた。

■地域を活性化する川・公園へ

川と一体的に整備を行った精進河畔公園や豊中公園は、すぐに子供の遊び場、住民の憩いの場となり、地域に活気をもたらした。